

松徳硝子

ものづくり紀行

東京・墨田区編

2

JR錦糸町駅から線路沿いに進むと、引き戸に墨書きの表札を下げた昔ながらの工場がある。窓を開け放った二階の作業場の呼称は「舞台」。赤く燃える窯を取り囲むように三十人余りの職人が黙々とガラス器を作る。

《会社概要》

▽本創	社業	墨田区錦糸4-10-4
▽事業	内容	1922年
▽売上	高	約3億円(2008年3月)
▽従業	員	41人

「量産ベースでは他にできることはない」と村松邦男社長(56)が胸を張るのが厚さ0.9ミリ級の極薄ガラス「うすはり」シリーズ。薄く均一にガラスを吹くには高度な技術が必要で、吹ける職人は同社にも六、七人しかない。

「下玉」と呼ぶ小さな玉んだ職人だ。若手はキャリブを作るところから始まり十年をはるかに超す。さらに必要な量のガラスを巻き、金型に合うなまなさを注ぐ。吹いたガラスの熱を冷やしていくのは経験が積まされ、余分な部分を切断。



薄く均一にガラスを吹くには高度な技術が必要

薄手ガラス0.9ミリ

職人技で量産品

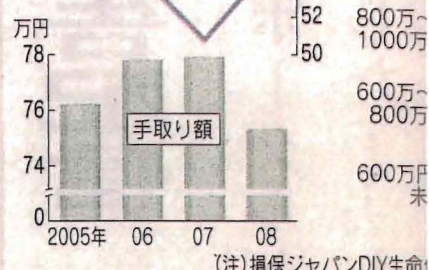
「口を微小な砂ですって平らかにし、さらに焼いて滑らかにして、ようやく出た荷だ。村松社長によると「ガラス器作りは親方一人いても成り立たない共同作業」。難易度が高いうすはりは、それぞれの工程で高度なスキルが必要になる。

松徳硝子が手作業で作るガラス器は一日に二千五百個。グラスのほかに花瓶、しょうゆ差しなどを生産。量産を指す以上、歩留まり向上と品質の安定は欠かせない。溶けたガラスの温度は放射線温度計で厳密に管理し、動に頼ってこの部分を直した。各工程で担当職人が出来栄を検査し、不良品は次の工程に流さないよう徹底する。

石炭を運ぶ川や運河がこの若手たちをつすはりを吹ける職人に育てる。全国から応募があった。

ビジネス

妻に聞いたサラリーマン世帯の夏のボーナス手取り額と家計の現状



賞与減、「へそくり」

損保ジャパン・ディー・アイ・ワイ生命保険によるとサラリーマン世帯のボーナス手取り額は今夏に75万3000円と昨夏から2万6000円減少したという。家計が苦しいと答えた妻は54.6%に上り、使い道も預貯金や生活費補てん、ローン返済、教育費が上位を占めた。食品やガソリンなどの値上がりで生活防衛色も濃く、カネが消費に向かわない実態を映しているようだ。

ボーナスから拠出する夫の小遣はゼロ。ボーナスの金を貯蓄のみに使った。直近のカーネン

Index

上海から始まる 森ビルアジア戦略

森ビルが中国上海市で建設を進めてきた複合大型ビル「上海環球金融中心」が今秋、完成する。森稔社長(73)の

- サーバー納期の短縮
- MRJ、部品メーカー

学生つな

六月末時点で約三百五十人に内々定を出した。内々定を出した学生が当社に入社してくれるとは限らないと思